

時事新報

第千二百七十三號
明治十九年五月十二日 (壬申)
舊丙戌四月九日
日出版時五時五十分
月出版時四時四十分
年出版時四時四十分
西曆一千八百八十六年

時事新報

日本社會の進歩

日本の開國は今と距る僅か三十年の昔に在り未開
 樂地地位より一躍して文明開化の國々と伍せ成さん
 とするもたなるがゆゑ其事業の困難にして進路の平
 滑ならざるは固より惟しむに足らず先づ明治維新の大
 業と成して舊時を頓滅し去るより去く大に文明
 進歩の路を開き其當坐急進急行の有様は手負猪の山坂
 と懸け下ると一般唯眞一文字に進むと去く左右を顧みず
 木に觸るれば木を倒れ石を觸るれば石を轉る向ふ所前
 なく其勢當たるべからず實に目覚ましきも亦愉快なる
 事相なり去然るも人心は倦む易きか將に荷物重くし
 て道の遠きに辟易したるか維新後僅か三十年内外又ま
 て早くも進歩の速度を減じ時後と顧みて昔しと思ふ
 の状なきにあらざるも全國社會一般の風潮は唯其
 速度の相違をのみ依然として改進の方向に在りて移
 らざりしがゆゑに未だ甚だしき變態と現はすに至らざ
 りたれども明治十四年政治社會に小變動ありし後ハ
 全國忽ち守舊退歩の風潮と捲起し兩來凡そ三年の間
 は奇蹟傳説天下を横行し世情不案内の人の眼より見れ
 ば光輝赫々たりし文明開化の靈燈もアハハ魔風の爲め
 吹消さるべしと思はるゝはかりありし我輩は此際日
 本國人に向て其憂慮の實を過ぐるを辨明せ且つ一時舊
 守退歩の議論喧まて去て無謀淺見の徒が身の程を顧
 みずして妄りに文明を仇せんとするは日本國の進歩の
 爲先に憂ふべき事にあらざるは實に甚だ喜ぶべき事な
 り何となれを人の力と金とを以て無理に製造せたる時
 世不適當の風潮は決して永續を得るものにあらずれば
 なりとして決してこれを憂ふることなかりし然れども一
 時其潮流の盛んなるに當てて興に乗じて無禮無法の事
 々も働き滿天下の人をして必驚くに憤悶に堪えざら
 り一旦世の風潮正流に復するの目來らば最早此等無謀
 淺見の徒に對して容赦寛假する所ありべく大あく小
 あく一切の弊弊を却去て子道なからしむべし而して
 又同時に一躍して文明開化の長進歩を爲す再び此等
 の徒の退及ぶ能はざるの地位に進め置んづと固く心
 を留めて一兩年を過す内早くも社會の風潮は元の文
 明の方向に復し守舊退いて開化進み進に隨て其速度を
 増し反動の力の廣大する實に開國未曾有の事相と社會
 現出したり明治十九年の文明改進の有様を取てこれ
 を十八年の有様と比較し又十八年を取て十七年に出較
 するに其進歩の一步の一步より速くにして又其及ぶ所
 の次第に廣く兼て文明に熱心なる我輩自らに於てす
 ら實に一躍と嘆せざるを得ざるの勢あり感んざりと云
 ふべきあり日本全國工商業不景氣の度は今年昨午
 よりも甚だしく昨年より又一年より甚だしくして民
 間の生意日に日に減退するにも拘らず文明開化
 のより日に進歩して日々に面目を改め正まき世の不
 景氣と相反する程の實跡あるは實に案外千萬の事相な

りと評せざるを得ず今此文明の風潮は決して再び退却
 するものにあらざる是よりしる次第に其速度を増せよと
 するも決してこれと減するの憂あるべからず日本全國
 の人もよき過去の事に鑑みて現在未來の有様を察し
 日本文明の今日以後益其靈燈の光りを増して永く變
 易するべしとの次第を十分承知せらるゝならんとい
 へども未來を語るは人情の憚る所ありて人言ひす吾
 れも語らず自然其語の盡さるる所ありて尙ほ躊躇の
 情去り難く一意文明の大路を疾驅して左右を顧みざる
 事と敢て爲ざる者ありて生涯の悔と招く者なきをも
 知るべからざるは我輩は愛お後來日本國の文明進歩の
 豫望を關する一二の事柄を擧げて世人の參考を供せん
 とするあり今日の國情を察するに所々の鉄道は縱横に
 延長きて益々其進歩を急ぎ全國一通り鉄道の便を備ふ
 るに至るは蓋し數年を出でざるあらん鐵道は文明を
 輸入して智慧 強弱は優勝劣敗れことと速やかに現
 道一たび成りて全國工商農業に何様廣大の變化を現
 出すべきや今より其度を測り知るべからざるなり又近
 來學校に教育法と専ら文明の法と採用し漢書と廢して
 英書を讀み和服を脱ぎ洋服を着る外形に内心も文明
 主義の少年子弟に身心に附着浸潤する今日の如く其だ
 しははらば二十歳の童子も十年立てば二十歳とある今
 後日を追て此學校生徒は成長するに連れ社會の變化
 は何様の點まで達すべきや實に想像にも及ばざるな
 り又條約改正事も今正に再議中にて近日其落着
 見を得べしといへり改正條約の果てて如何様のもの
 の出るべきや固より今日に知るべからざるといへども内
 外人雜居の事は其方法の急漸如何と問はず近日其實施
 と見るに相違なくらん是亦日本社會の有様を變化する
 の一大元素なり又昔を舉げて海外諸國の有様を見るに
 文明進歩の速かざる實に驚くべきものあり近く日本ハ
 大關係あるパナマ地峽は運河の如き數年の内に竣工去
 て歐米より亞細亞極東の地に往來するの船舶は皆此便
 路を利用して日本海は繁昌今日に幾倍するものあらん
 或の北米カナダの鐵道を利用して日本と英領コロンビ
 ヤとの間に郵船定期航海をはじむるも近日又あるべ
 く或の米亞の關係を近密にする爲め太平洋と東西に横
 斷して日本と米國との間に海底電線を設くるも亦近日
 にあるべく兎角去て歐米人は日を追て多く日本に來
 り日本人は日を追て多く歐米に行き日本社會の有様
 は後來遂に何様の度まで變化すべきや實に今日より
 り想像を越えざるあり日本内外の事情實に斯の如し
 今日此國に住居する人々は驚と此等の事情を察して文
 明に進むの安心を定めたりは躊躇疑感して生涯の悔を
 遺すことあり

一同その來着を待受け出迎等の用意區々あり去る
 十九日に之右の發起人數名が集會してその準備の相談
 ありそれ大略を聞くに同乗組は汽船入港を見れば見
 張りの者より一同へ急報し一同道堂(波戸場)に出迎ひ
 直に官舎に招待し滞留中は大綱曳、烟火、波龍船、沖繩
 踊、競馬等と催し又警察官は警備と一覽に供するや
 てその意氣相過般内務大臣一行來縣の時より一層盛
 ある模様なりかくて本月廿二日午前七時兼て待ち設
 けたる豊瑞丸入港、島津氏は直に上陸して官舎へ着
 ぬ此時道堂まで出迎ひするは大書記官森長義氏を始め
 各課長鹿兒嶋出身の官吏及び同縣より寄留商人等數
 十人ありし滞留中は前記の催しとなし且同縣官及び鹿
 兒島縣人より招待饗應等と概ね盛んなく本日は物見
 城(那覇城)にて饗宴あり波龍船の催もある筈なり同氏
 比當地滞留の多分十日間位あるべしといふ

○朝鮮近報 左の數項は近日朝鮮より歸朝したる社友
 の實話に係るものあり

○デューイ氏 朝鮮政府より先般米國より傳入れる
 デューイ氏の内務府の内外務に關係する等なりしが氏
 が朝鮮より來りし以來今日に至るまで(去る四月十八日)
 朝鮮政府の差も政務に關係せしめず且つ氏之外務門に
 も出頭せずといふ○朝鮮乾編 朝鮮國の東岸一線に
 漁業が富み毎年同地方より日本に乾編を積み出すと
 少なからず米朝鮮船に積み込み途中にて日本船に積
 め替へ然る後日本に送るものにて輸出港を定まりな
 く且つ日本人が無暗に廉價にて買ひ取るに嘆かざるに
 朝鮮政府にてはるの監理法と考案中なりといふ○京
 城の屠牛 朝鮮京城には屠牛場凡そ二十八所あり毎所
 にて毎日三頭以下を屠りその餘は一切の屠牛を禁する
 と以て京城内の需用に足らずを以て日本
 人大塚角次郎なるもの京城に開店して屠牛の業を開き
 朝鮮政府の國禁を屬するを以てその開業を禁せん
 と欲し又た日本人は治外法權を主張去る三月下旬以
 來双方互に固執して聴かず今に談判中なりといふ(四
 月十五日時事新報京城通信を參看せよ)○田中親之氏
 朝鮮の仁川日本居留地にある官立病院は今回更に
 私立病院となり前院長田中親之氏は去る四月下旬に出
 立日本に歸れりとす

○軍醫會議 其筋を來月中旬頃各鐵道病院長の軍醫
 と召集し會議し開く筈なりといふ

○疫疫本部 滋賀縣にての近々コレラ病流行の徴候
 を以て去る四日より縣廳内へ檢疫本部を設置したる
 よし

○音聲取調所 上野同取調所の學生 去る卒業生
 しくは三名の女子れみなり男子に去る十六年
 中取調し目下修業中のものは十六名あり尤も同生徒
 は來る二十年の二月が卒業期にて此修業に十名の學
 生を本校せしめ關人ツファン氏と教師に聘し今台奏
 専門の課を増加し唱歌之宮内省の雅樂師某氏の擔任を
 るよし又前十名の卒業したる上は師範學校等へ派遣せ
 ると云ふ

○編輯買上 東京商業學校にて今度八俣の小形ある
 編輯を買上げ各生徒に交番にて一週二時乃至三時間づ
 づ教員附添ひ墨田川に於て遊樂とあしむる都合にて
 休校と並びて正課中に加へる事未定めたるよし

○英語演述 第一高等中學校にては本日午後三時より
 同校講義室に於て東京獨立新聞社のイノストラレー氏

に英語演述
 ○九十九橋 福井通信員
 幕の時代よ
 の九十九橋
 北ノ庄の頃
 月三日とい
 て惠燈大師
 分に折絶し
 前代未聞の
 時頃小生通
 に恰も惠燈
 上に群集し
 行列の後方
 れば直に現
 沈みゆ流さ
 泳ぐ廻るが
 の葉の散亂
 聲實は物凄
 直に警察本
 都巡査を始
 番の巡査一
 に盡力し福
 校長教師生
 又九十九橋
 かる消死
 々に禁出を
 師の給食は
 無異は片山
 變事の趣き
 二重箱にて
 以て同日午
 去に見送り
 陷路をるや
 時通行人の
 九頭龍橋の
 橋に取掛り
 上る見込な
 ○沖繩通信
 當月六日は
 者も勿論
 諸事を用
 至れば當
 重詰を携へ
 ントの類を
 持ちてドン
 一同盛裝と
 物人群集と
 日より一周
 兩三日間之
 れも暑参り
 と携へ東京
 恰も東京の
 や去る十日
 幸い死あ

雑報

○島津忠義氏沖繩縣來省 四月廿三日那覇通信員發
 鹿兒島藩主島津忠義氏には本月廿一二日の頃當地へ
 來遊する由にて當地寄留の鹿兒嶋縣人之官民の別なく